ナシ（納西）族の東巴教開祖に關する神話の一考察

村井信幸

序
第一章　丁巴什羅（Dto-mba Shi-lo）に關する神話
1天地混沌の狀態から神々、精靈、鬼靈の出現まで
2丁巴什羅の誕生からラマ僧との爭いまで
3可庶瑪（女魔鬼）の横行と彼女の殺害
4丁巴什羅の死と三人の弟子
第二章　ナシ族の神話へのチベットからの影響
第三章　丁巴什羅に關する儀禮
結語

序

周知の如く、西南中國には數多くの少數民族が居住し、漢民族と接觸しながらもそれぞれ固有の社會文化を保持し續けてきた。本稿で紹介するナシ（納西）族は、チベット・ビルマ（ミャンマー）語族に屬する西南中國少數民族の一つである。その主要居住地域は中國雲南省麗江納西族自治縣（現玉龍納西族自治縣）を中心として、中甸縣（シャングリラ、香格里拉）縣、維西傈僳族自治縣、寧蒗彝族自治縣及び四川省境域一帶である。人口總數は約三十萬人であり、居住地の中心である麗江納西族自治縣に約十七萬人が居住する。[1]

この民族はかつては高地農牧民であり、農耕と牧畜をあわせて營んできたが現在は農耕が主である。[2]

その歴史については、後漢時代の西羌の一支である犛牛羌の絲統をひくものであり、言語學的には白狼羌と密接な關係があるとされる。漢籍史料には「麽些」「磨些」等の名稱で現れ、近年でも「モソ」"Mo-so"等の名稱が用いられることが少なくない。一九六〇年代から、その自稱に基づいて「ナシ」（納西）族と稱されるようになった。[3]

その宗教は、チベット佛教（ラマ教）、佛教、道教等も信仰されているが、數多くのナシ族がその古來の宗教である東巴（トンバ）教を信仰している。[4]

彼らの大きな文化的特徴は、固有のナシ文字を持つことである。ナシ文字には、「象形文字」と「音標文字」の二種類がある。巫師である東巴はこれらのナシ文字で記された「東巴經」を儀禮を行う際に朗誦する。「東巴經」に記された內容は主に神話であり、洪水神話、龍神話、情死者の神話等多種がある。特に洪水神話については同じくチベット・ビルマ語族に屬するイ族、リス族、ハニ族等には「兄妹婚型」のものが廣く傳承されているが、ナシ族の間にはそれほ

ど色濃く見られないということが特徴であるといえよう。[5]

これらの神話に關する資料は民國時代から中國人研究者、歐米人研究者によって收集された。新中國成立後も東巴經は活發に收集整理され、膨大な研究が行われている。[6]

本稿では、ナシ族固有の文化の性格を明確にするために、その神話について論述したい。ナシ族神話の宗教、信仰の中での役割とチベットからの影響を明確にするために、ナシ族古來の宗教である東巴教の開祖に關する神話について考察したい。

第一章　丁巴什羅に關する神話

ナシ族の東巴教の開祖は、丁巴什羅（東巴神羅・多巴神羅）Dto-mba Shi-lo と稱される。[7] 東巴教はチベット古來の宗教であるボン教の影響を大きく受けている宗教であり、巫師「東巴」Dto-mba の名稱はここに由來する。ナシ族の神話はチベット・ビルマ語族集團の中でも特に濃厚なチベットからの影響が見られる。

丁巴什羅に關する神話は、民國時代に J. F. Rock 氏、李霖燦氏等によって翻譯、整理され、膨大な研究が發表されている。新中國成立以後も活發な收集、整理が行われ、『納西族東巴古籍譯注全集』が刊行され、方國瑜、和志武、和力民、楊福泉、戈阿干、白庚勝、趙心愚等諸氏の緻密で活發な研究が行われている。これらの研究に基いて、本章では丁巴什羅の神話を紹介するが、內容が非常に長いので、まず項目ごとに分けて、その梗概を示し、內容ごとに分析して考察したい。

この神話は、まず天地混沌の狀態から、神々、精靈、鬼靈が出現する物語から始まる。前記した如く、その內容は非

常に長いものであるので、物語の進行にあわせて1天地混沌の狀態から神々・精靈・鬼靈の出現まで。[8] 2丁巴什羅の誕生からラマ僧との爭いまで。[9] 3可庶瑪（女魔鬼）の横行と殺害。[10] 4丁巴什羅の死と三人の弟子。[11] の四つの部分に分けて考察したい。

1．天地混沌の狀態から神々、精靈、鬼靈の出現まで

昔、天と地はまだ存在せず、太陽、月、星、惑星も存在していなかった。山、小川、岩、木も存在していなかった。上方から「聲」が、下方から「氣」が誕生した。聲と氣は交わり輝く魂が出現した、それは美しい聲を出すものに變わった。このものから白骨大神（Hä-ddü-Ö-P'er）が出現した。白骨大神は宜孤烏葛（Ö-gko aw-gko）が出現するようにした。宜孤烏葛から薩莉韋德（Ssaw-yi wùa-de）が出現した。この神から其莉敦孜（Muàn-llü ddü-ndzǐ 人類の父）が出現した。其莉敦孜は變化して白い天、地、太陽、月、星、山、谷、崖、湖が出現した。其莉敦孜は白い湖邊を歩いていて、伴侶を得て、共に話しをして、食料を作り、高山で遊牧をし、牧羊をしたいと思った。彼の口から白い唾が流れ、白い涙も流れた。彼はそれらを集めて湖に投げ込んだ。三日後に水女が出現した。名をつける者がいなかったので、彼は初卓嵇母と名づけた。彼らは結婚して、九人の息子を育てて九つの村を作り、七人の娘を育てて、七つの地を作った。子供達は成人して去っていった。其莉敦牧の口の唾は白い湖となった。白い湖からは、五個の白い卵が生まれた。一個からは宜士保拙（Yi-shi-Ö-dzo 其莉敦孜のための東巴）が出現した。次の一個からは陌帕恩哈（巫者（端公）、占トを行う）が出現した。次の一個からは、彼の白山羊、白い綿羊が出現した。卵殼、卵水は變化して白い天、地、星となった。そして綠卵、黄卵、花卵が出現した。綠卵からは海冥跋達（神樹）が出現した。花卵からは居那世羅山（巨那茹羅、Ngyu-na shi-lo, カイラス山）が出現した。黄色い卵からは、則則海盧（大神龍）が出現した。最後に出現した卵水は變化して、其莉大嵇（神湖、Manasarowar）が出現した。居那世羅神山の頂上には薩莉韋德大神が鎮座した。

薩莉韋德大神、其莉敦孜、東巴の宜士保拙はどのようにして天地開闢するかについて相談した。

丁巴什羅の神話の最初の部分について考察すると、[12]天地混沌の狀態から神々が出現するが、人類の父とされる其莉敦孜は「白」に非常に密接な關係がある。彼の敵である鬼靈の其莉術王は黑と密接な關係があり、この鬼靈からすべての黑い鬼靈が出現する。ナシ族においては神々、精靈は白で表現され、鬼靈は黑で表現される。所謂「尙白」「忌黑」の概念はナシ族の社會に色濃く見られるものであるが、チベットにも廣範圍に見られる。[13]また神話中に現れる「居那世羅神山」は、チベットのカイラス山に比定されるものである。この神山によって天・地は支えられ、神話の主人公である丁巴什羅は、この山に住んでいる。チベット古來の宗教ボン教の開祖であるシェンラプ・ミボはこの山から生まれたという。[14]

またこの神話では、卵から神々、東巴、巫師・神山・神湖・神樹が出現するが、ナシ族の創世神話「人類遷徙記」においては、白い鷄の卵から神々、精靈が出現し、黑い鷄の黑い卵から鬼靈が出現する。このようにナシ族の創世神話には「卵生神話」の要素が顯著に見られ、「卵生神話」はチベットにも數多く見られるものである。[15]「尙白」「忌黑」の概念、「卵生神話」については第二章で後述したい。

2. 丁巴什羅の誕生からラマ僧との爭いまで

續いて丁巴什羅の誕生の物語が始まる。黃金の雄鷄が天に向って鳴き、某莉啊龍、Muan-lü-yu-yu 初代祖母）が出現した。續いて莉尼突突、Lü-yu tú-tu, 二代目祖母）が出現した。さらに突突尼韋、Tú-tú Nyi-wua, 三代目祖母）、尼韋薩薩 Nyi-Wua Ssaw-ssaw 四代目祖母）、薩薩薩拉（Ssaw-ssaw ssaw-la, 五代目祖母）薩拉巨姿（Ssaw-la Ngyu-dzu 六代目祖母）薩仁勞則嵇母（Ssaw-zaw-lěr-dzi gyi-mun 七代目祖母、丁巴什羅の母）が出現した。

吉婆出不、（Gyi-sso-ch'ung-mbu 初代祖父）が出現した。續いて出不聶日、（Chúng-mbu Dto-dzhi, 二代目祖父）

が出現した。さらに聶日多巴、(Dto-dzhi Sse-dto, 三代目祖父)、多巴伯那、(Sse-dto Bä-na, 四代目祖父)、伯那阿韋(Bä-na Ä-wua 五代目祖父)、啊韋莉舍(Ä-wua Lü-de 六代目祖父)、拮拉跋葛迪(Gyu-la-bpa-go-dti 七代目祖父)拉步突葛(Gyi-bbu Tú-go 八代目祖父)嵇步突葛(La-bbu T'u-go, 九代目祖父、丁巴什羅の父)が出現した。

嵇步突葛と薩仁勞則嵇母は、結婚し、九ヶ月十三日たって丁巴什羅は生まれようとしていた。丁巴什羅は母に言った。「私はどこから出ればいいのか。」(彼はまだ母の胎内にいる)母は「すべての者が出て行く道(産道)から出ればいい」と答えた。しかし、彼は拒否した。「この道は木淨で私は出ることができない。」三日後の朝に彼はいった。「私はあなたの左脇から生まれよう。」

三日後の朝に彼が誕生したことが廣まった。毒鬼、則鬼、次鬼、聶鬼等の鬼靈がかってきて母にいった。「尋常でない子が生まれたという。我々に見せてくれ。」母は「母虎は息子を育てて守るべきだ。見せるわけにはいかない。」といった。そこで丁巴什羅はいった。「秀でた子は鬼靈を恐れることはない。見せてもかまわない。」母は彼を鬼靈に見せた。鬼靈は彼を見て驚いて叫び涙を流した。鬼靈は丁巴什羅を鍋に投げ込んで煮ようとした。三日三晩の後、彼は大銅鍋からとび出し、神山に逃れ、そして十八層の天に住んだ。鬼靈は恐れて地上に彼らのいる場所がないことを知った。そこで丁巴什羅は天上の神々から鬼靈を鎮壓する力、死者の魂を祖先の地に送る力を與えられた。

天上で丁巴什羅は、錦のテントに住み、東巴經を唱え、寫經をした。この時三人のラマ僧も經を唱え、寫經をしていた。ラマたちは、朝食をとり、バター茶を飲む時に丁巴什羅を招待しなかった。彼は怒ってラマに復讐しようと思い、呪文を唱えた。すると左から白風が右から黑風が起こり、ラマの經典を四方に吹き飛ばして、ページの最初と最後がわからなくなった。ラマは非常に困った。丁巴什羅が結局經典を一頁も誤りなく整理した。ラマは彼の神通力に敬伏し、その衣服の袖を切り取り、ズボンを脱いで丁巴什羅に獻上した。東巴がズボンをはき、ラマ僧はズボンをはかず、その

衣服にも袖がなくなったのはこのことに由來する。[16]

この神話では、丁巴什羅の誕生以前にその父親の九代の系譜と母親の七代の系譜が語られ、それらの名稱にチベット・ビルマ語族に數多く見られる父子（母娘）連名制が見られる。丁巴什羅に關する神話に現れる神々、精靈、鬼靈は、ナシ族の他の神話に現れるものと共通である。しかし、彼の「父方の祖先」「母方の祖先の系譜」は、他の神々の系譜と異なる。神話「人類遷從記」に現れる地上に降りた最初の人類である「崇忍麗恩」（草羨里爲爲、Ts'o-zä-llü-ghugh）の誕生までの人類の祖先とは一致しない。このようなことから丁巴什羅の神話はナシ族の神話の中で特別な位置にあるものといえよう。

また丁巴什羅が誕生の時、人間の一般的な產道を通らずに母親の左脇から生まれたということは、シャカの例と比較しても重要であり、佛教の影響も考えられる。誕生後彼は十八層の天に昇り、神々から巫師（シャーマン）として最も重要な能力である鬼靈を鎭壓できる力、死者の靈を祖先の地に送る力を與えられる。このことが東巴教の成立につながるのである。

次に丁巴什羅とラマ僧の爭いであるが、前記した如く、東巴教はチベット古來の宗教ボン教の影響を濃厚に受けている。ナシ族は現在東巴教とチベット佛教を同時に信仰している。丁巴什羅とラマ僧の爭いは、ボン教の影響を受けた東巴教とチベット佛教の複雜な情況を示唆していると思われる。[17] この問題は第二章で詳述する。

3．可庶瑪（女魔鬼）の横行と彼女の殺害

人類の住む地上では、可庶瑪（司泊佐可庶瑪、李霖燦氏は「可庶瑪」と略稱しており、本稿では李氏の表記で論述したい。）という女魔鬼が祟りをなし、三百六十の鬼靈を率いて人間を殺し、野性の動物、家畜にも安住の場所はなかった。人類は相談して、自分達を救えるのは丁巴什羅しかいないと考えた。そこで韓英精褒排（Ha-yi-dzi-bua-p'er）と

いう白蝙蝠[18]を派遣した。白蝙蝠は大鳥に乗って十八層の天へ向かった。彼は丁巴什羅と對面し、女魔鬼の地上での横行、人間への罪行を訴えて、彼女を滅ぼして人類を救ってくれるように願った。

丁巴什羅はその願いを聞き、天神達と相談して地上に降りることになった。天神達は什羅に法寶、九十九部の經典、白鐵の神冠、黄金の板鈴、頂扇、眞白な法螺貝、トルコ石の法鼓、神弓、寶刀等の東巴教の呪具、そして錦のテントを送った。丁巴什羅は白色の神馬に跨り、天上のヤク、犏牛に經を背負わせ、黄象、白象に呪具を背負わせ、數々の守護靈に付き添われ、弟子の東巴三百六十人、兵士、將官千萬人を率いて、右手で黄金の板鈴をゆらし、左手で法鼓をたたきながら地上に降りていった。

彼は天から太陽、月、星、雲、虹を通り、毒鬼、仄鬼、署鬼、尼鬼、敦鬼、臭鬼、楚鬼、呆鬼等の鬼靈を東巴の助けを借りて鎮壓した。彼は人類の住む地上に到達した。女魔鬼可庶瑪は鐵鍋、銅鍋、九本の鋭利な刀、九本の繩、トゲ等を持って彼を待っていた。可庶瑪は「お前はこの不浄な地に何をしに來たのか」といった。什羅はおびえて答えた。「私は天上に九十九人の妻がいる。百人にあと一人足りない。この大地上に素晴らしい女がいると聞いた。私はあなたを娶るために來た。」可庶瑪はもしあなたが本當に私を娶るならば誓わなければならないと要求した。彼は誓約した。彼女は鐵鍋、銅鍋、繩、刀、トゲ等を天地の間に捨てた。丁巴什羅と可庶瑪は結婚した。可庶瑪は人に祟りを起こすものであり、丁巴什羅は人に祭祀を行うものであった。

戈盤若金（男）開美命金（女）が病氣になった。そこで丁巴什羅を招いてお祓いを願った。可庶瑪はいった。「お祓いをしてから、その家の主人から謝禮を受け取ってはならない。その災いは私にふりかかる。」彼は戈盤若金と開美命金の家に行った。お祓いが終ってから、彼は謝禮を受け取らなかった。戈盤若金は謝靈を受け取ってもらわねば、鬼靈を消滅できないと思った。彼はこっそりと鴨（鳩）の卵ほどのトルコ石を丁巴什羅の白馬の髦につけた。丁巴什羅は白

馬にまたがって家に歸った。可庶瑪は重病にかかっていた。彼女は「あなたが約束を破って謝靈を受け取ったから私に災がふりかかった。受け取っていないというのなら、自分の馬の髦を見るがいい。」といった。丁巴什羅は馬の髦にトルコ石がつけてあるのを見つけた。彼はいった。「養った家畜は殺さねばならない。種まきした作物は刈り取らねばならない。」丁巴什羅は三百六十人の弟子を呼んで可庶瑪を殺し、彼女の鐵鍋、銅鍋刀、繩等を燒き捨てた。可庶瑪は死ぬ前に丁巴什羅に對する數々の呪いの言葉を殘した。丁巴什羅はそれから三百六十の鬼靈を鎭壓したが、小鬼のみは殺さなかった。そこで鬼靈は再び繁榮した。

丁巴什羅は鬼靈を鎭壓してから、居那世羅神山の山麓で三羽の白雁（雉）に出會った。三羽の雉は彼にいった。「お前は人の背後の鬼靈は見えるが、自分の背後の鬼靈は見えない。可庶瑪を殺してから、お前には鬼靈がまとわりついている。藏族、白族、ナシ族の祭司に祭祀を行ってもらわねばならない。彼はこれらの祭司に儀禮を依頼した。[19]

女魔鬼の可庶瑪の横行のため、地上の人々は丁巴什羅に救いを求める。彼は神々から地上へ派遣される。その際に彼は最初の巫師（シャーマン）として儀禮を行うのに必要な經典、板鈴、弓矢等を神々から賦與される。この時に彼の最初の巫師（シャーマン）としての役割が明確にされる。丁巴什羅は可庶瑪を殺し、三百六十の鬼靈を鎭壓するが、まだ物語は終了しない。

4．丁巴什羅の死と三人の弟子

女魔鬼可庶瑪の死は、丁巴什羅を危險な狀況に陷れる。彼の心は落ちつかなかった。彼は毒鬼の黑湖に行き、帽子を脫いで前に捨てた。衣服を脫いで帽子の後ろに捨てた。黑い靴を脫いで上方に捨てた。首から數珠を取って中間に投げた。彼は水浴し、そこで彼の鋭い眼と聰明な心は醜くからみついてしまった。第一の毒鬼は彼の頭を取った。第二の毒鬼は眼を奪った。第三の毒鬼は魂を攝取した。第四の毒鬼は骨をかき出した。第五の毒鬼は肉を取った。第六の毒鬼は

血を吸った。第七の毒鬼はその體を運び去った。そして七人の毒鬼は丁巴什羅を黒湖に投げ込んだ。

丁巴什羅の三人の弟子、套補塔、蕊補塔、納補塔は、毒鬼の黒湖から彼を救い上げねばならなかった。彼らは杖を湖中に伸ばした。杖に烏の尾の羽根の紐を結びつけて丁巴什羅の魂を救い上げた。三人の弟子は、千頭の白ヤク、一萬頭の黒ヤク、一千頭の褐色の馬、一萬頭の灰色の馬、九つの人形、九つの握り飯、長山羊を使って、毒鬼に對して償いをした。祭司構補依端、套補塔、蕊補塔、納補塔、そして丁巴什羅の三百六十人の格巴の弟子は、彼を居那世羅神山の山脚、山頂へ。その魂を三十三の神々の領土へ、九代の父系の祖先が住む地へ、七代の母系の祖先が住む地へ送った。そして、沃神と恆神の地へその魂を送った。彼の父が住む地へ、彼の母が住む地へ送った。丁巴什羅は神地に至り、身も心も安らかになった。彼はついに祖父、祖母、父、母の前に致った。自分の伴侶の前に到った。そして、人間が竝び立つ山崖（人が死んでから遺體を置く山洞）の前に到った。[20]

本文中で重要な役割を果たす毒鬼[21]は、ナシ族の鬼靈の中でも最大のものである。彼らは女魔鬼可庶瑪と密接な關係があり、丁巴什羅と常に對決する。丁巴什羅は可庶瑪を殺してから彼らを鎮壓するが、その後彼らは災いをもたらし、彼を殺して黒海に投げ込む。丁巴什羅の三人の弟子の東巴が中心となり、數々の鬼靈を祓って、彼の魂を救い出し、神々の住む地へ送るという箇所でこの神話は終わる。[22]

第二章　ナシ族の神話へのチベットからの影響

前記した如く、ナシ族の東巴教はチベット古來の宗教であるボン教の大きな影響を受けている。ナシ族はチベット・ビルマ語族に屬するが、その神話には特にチベットからの影響が濃厚に見られる。本章ではナシ族の神話へのチベット

からの影響について考察する。

まずチベット古來の宗教ボン教について一言すると、チベットに佛教が正式に布教されたのは、7世紀半ばの唐代の頃であった。それ以前にチベットにはボン教と呼ばれる宗教が流布していた。このボン教こそチベット人の間に生まれ、その信仰に支えられてきた民族宗教であった。ボン教は前5世紀頃、西チベット出身のシェンラプ・ミボによって創始され、バラモン教の影響を受けて誕生したとされる。8世紀から10世紀にわたり、200年にわたる佛教とボン教の爭いが續き、吐蕃において8世紀に佛教が國教とされ、ボン教は禁止された。佛教に追放されたボン教は、雲南に逃れてナシ族（當時は麽些（磨些））の社會に布教されたとRock氏はしている。楊福泉氏も數多くのボン教徒が雲南、四川とチベットの境界に逃れてナシ族の宗教に影響を與えたことを指摘している。[23]

唐代初期に、ソンツェン・ガンポ王の提唱により佛教は上層階級の間に廣まった。この時期は吐蕃の社會ではボン教の勢力がまだ強く、佛教との爭いが絶えず存續していた。當時邊境の吐蕃の軍隊は、依然としてボン教を信仰しており、吐蕃軍では「軍中苯教師」制度が行われていた。軍中には數多くのボン教の巫師が配備され、この時吐蕃の支配下にあったナシ（麽些）族の宗教に大きな影響がもたらされた。當時の吐蕃軍には、千戸ごとに一人の「拉本波」と呼ばれる大巫師がおり、戰鬪時には「拉巴」といわれる小巫師もいた。吐蕃軍が四川省西北地區を征服してから、一部の官兵が當地區を支配し、巫師とボン教徒が當地に定住し、ボン教が盛んに布教された。[24]

唐代の吐蕃兵は、當時の麗江の鐵橋一帶のナシ族居住地に駐留しており、ボン教の信仰がナシ族の宗教、社會に與えた影響は疑いない。[25]

次にナシ族の東巴教へのチベットからの影響を明確にするために、本論稿の中心となる丁巴什羅とボン教の關係について考察したい。かつてRock氏は丁巴什羅はボン教の開祖のシェンラプ・ミボと同一のものであると考え、新中國成

立後、數多くの研究者がこの點を指摘している。ボン教の開祖シェンラプ・ミボは中國語で「東巴先饒」と稱され、發音からも「丁巴什羅」と對應する。楊福泉氏は丁巴什羅はボン教・佛教とナシ族の本土文化の諸要素が融合して形成された人物像であることを指摘している。つまり、東巴教とボン教は同源であると簡單にいうことはできないが、東巴教がボン教の非常に大きな影響を受けた宗教であるということは指摘できる。

ボン教は古くは一種の原始巫教であり、チベット・青海の廣大な地域に流布していた。ナシ族の先民は、かつてチベット東北部、青海河湟流域で活動した古羌であるとされ、その族源、言語もチベット人と非常に密接な關係があり、原始宗教の形態から見ても緊密な關係にあるとされる。東巴教の祭司である東巴は「本補 běn bǔ」と自稱しており、同じくチベット・ビルマ語族に屬するイ（彝）族の巫師も「比摩（ピモ）」と呼ばれる、ハニ（哈尼）族の巫師も「貝牟」と呼ばれ、發音もボン教の巫師「苯波」と非常に近い。イ族の比摩教にもボン教と類似した多くの特徴があることが報告されている。[26] つまりボン教は、チベット・ビルマ語族の宗教全體に大きな影響を及ぼしているが、特にナシ族の東巴教に顯著な例が見られるといえよう。[27]

次にナシ族の神話へのチベットからの影響をさらに明確にするために「卵生神話」について考察したい。前記した丁巴什羅の神話の最初の部分には卵生神話が見られる、ナシ族の「卵生說」の生命觀とボン教の生命觀は非常に類似している。ボン教も東巴教も同樣に、世界の起源を語る時に、最初に神々と鬼靈の誕生から語り始める。ボン教の神話では、世界の起源は、いくつかの卵によるものである。東巴教では、世界と生命は卵に起源するとされている。[28] ナシ族の神話で丁巴什羅の神話以外で「卵生神話」の事例をあげると、前記した「人類遷徙記（創世紀）」では、天地混沌の狀態がまず語られる。聲と氣が結合して善神依格哦格が出現した。後に黑い光が變化して邪惡な聲と氣が結合して、惡神依格低那が出現した。衣格哦格は變化して、一個の白卵を生んだ。白卵から白鷄が生まれた。白鷄は九對の白卵を孵化した。

白卵から盤神（天上の半人半神・藏族の神）が出現した。そして、禪神（地上の半人半神、白族の神）、喂神（勝利神）、吳神（ナシ族の神）、陽神董と陰神色、靈巧神（すばしこい神）、知惠神、測量神、度數神、酋長と頭人、祭司とト師（巫師）、そして人類が出現した。惡神依格低那から一個の黑卵が生まれ、黑卵から兹鬼、忸鬼、毒鬼、爭鬼、孟鬼、恩鬼（水鬼）、湊鬼（穢鬼）、支鬼（豹鬼）、短鬼（凶死鬼）、拉鬼等の鬼靈が出現した。[29]

以上の卵生神話では、白い卵からは神々精靈が、黑い卵からは鬼靈が出現する。前記した如く、ナシ族には「尙白」「忌黑」の觀念が存在する。ナシ族の神々、精靈には、必ず惡の對象物となる鬼靈が存在し、神々、精靈は白で象徵され、鬼靈は黑で象徵される。例えば「人類の父」とされる神美利董主（某莉董主）には、美利術主という鬼靈がおり、東巴教「黑白戰爭」で兩者の爭いが詳細に語られる。[30] この黑白對立の觀念はボン教にも見られるものであり、大きな研究意義がある。「尙白」は古羌人の觀念の影響と考えられ、ナシ族の社會に廣く見られる白石神に對する信仰もその一例と考えられ、やはりチベット・ビルマ語族に屬する羌族、プミ族にも白石神に對する信仰が見られる。[31]

以上の如く、ボン教の東巴教への影響を中心に考察したが、ナシ族はチベット佛教を信仰している。次にナシ族とチベット佛教の關係について考察したい。

楊福泉氏はナシ族とチベットとの關係において、最も重要な時代として唐代と明代をあげている。ここで明代の狀況を論述する。明朝は成立時において、北元等のモンゴル系勢力の攻擊に常にさらされていた。その觀點から、チベットは非常に重要な位置にあった。明朝のチベット政策において、雲南という地理的環境からナシ族の土司[32]麗江木氏は大きな役割を果たした。

次に木氏について一言すると、13世紀にフビライは雲南遠征をして、後理國討伐を行った。その時ナシ族の土酋阿琮阿良が將軍ウリアンカタイの軍に協力し、茶罕章宣慰司に任ぜられ、以後その職を子孫が繼承した。明代になり、洪武

年間に阿琮阿良の子孫である阿甲阿得が王朝に服屬し、麗江の土官土知府に任ぜられた。以後彼は明朝から「木」姓を賜り、「木得」と稱し、麗江土司としてその地に絶大な權力を持った。その後、木氏は清代雍正年間の改土歸流において權力を失なうまでナシ族の社會を支配した。木氏の統治期間がナシ族の歴史上最も强力な時代であった。明朝にとって、チベットへの政策において麗江、永寧（寧蒗）等のナシ族主要居住地域はその戰略的要地となったのである。[33]

木氏は明朝の信任を得て自己の勢力を擴大して、雲南、四川の藏族居住地に侵略を行う。その情況は、清代餘慶遠の『維西見聞錄』に詳細に記されている。

明朝は木氏によるチベット攻擊を「邊患征討」と見なしており、それ故に兩者はチベット勢力征討という點で利害の一致をみていたと考えられる。つまり、木氏によるチベットへの軍事行動を忠臣の行爲と捉え、その力を必要とする明朝の姿が讀み取れる。[34]

「木氏宦譜」（木氏の系譜）の記述から見ると、麗江付近の金沙江と瀾滄江の上流一帶は、木氏と藏族土司の鬪爭の主要區域であった。その重點は你那（現維西）、石鼓、忠甸（中甸）等であり、この一帶における兩者の鬪爭は三十回以上に及んでいた。木氏は占領地で村落を建設し、移民を行った。

また木氏は天順年間（一四五七―一四六四年）以降、隣接の藏族居住地を占領し統治下に置きつつ、チベット佛教カルマ派との交流を行った。木氏の雲南、四川の藏族居住地域の占領統治の政策で最重要なものは、統治を圓滑にしていくために、チベット佛教を重視したことであった。ナシ族の社會にチベット佛教が廣まったのは明代の頃であり、歴代の土司の中でもチベット佛教を最も厚く信仰したのは、明末の木增であった。チベット佛教の布教は彼の時代に最も活發に行われ、特に數多くの寺院が麗江に建立されている。そしてチベット佛教紅帽派六世活佛却吉旺秋、黑帽派十世活佛却英多吉が木增の時代に麗江に滯在し、經典の編集、布教を行っている。[35]

このようにしナシ族の東巴教は、ボン教の影響を受けているが、チベット佛教の影響も受けているといえる。ナシ族の神話がチベット・ビルマ系諸族の中でも、特にチベットからの影響が大きいという點はその歴史的過程からも推察できる。

なおチベット佛教と東巴教の關係を示唆するものとして、下記のような說話がある。

一說によると丁巴什羅と彌勒佛は同年同月同日に生まれた。兩者は居那世羅神山の頂上に登った方が天下の智者であり、この神山に鎭座する者であると決めた。翌日の明け方に太陽が登ると彌勒佛は太陽の光に乘って、居那世羅神山の頂上に登った。丁巴什羅は手鼓を持って、うなぎ登りで登った。兩者は追いつ追われつ電光のように早くゆずらなかった。神山の頂上に到達したのは、彌勒佛が一步早く勝利を得た。そして約束通り居那世羅神山に鎭座した。丁巴什羅はいった。「あなたは天下の智者という地位を得た。私はいるところがない。行くところを指示してほしい。」彌勒佛は神山山頂の雪を一つかみ遠方にまき散らして答えた。「雪の落ちた所がお前の修行の場だ。」この雪はちょうど二月八日に中甸の白地に落ちて白水臺を形成した。丁巴什羅はこの地へやって來て、弟子を集めて廣く東巴教を傳えた。彼は作物を作ることに習熟しており、白水臺の地形が段々畑になっているので、當地の人々に段々畑として使わせた。中甸縣白地の白水臺が肥沃な段々畑となったのはこれに起源するといわれ、後の二月八日の白水臺の盛會もこのことに由來する。[36]

この說話は、李霖燦氏も「多巴神羅和密勒日巴的故事[37]」の題名で發表しており、李氏はこの物語を紅帽派チベット佛教と東巴教の爭いと考えており、ボン教の影響を受けた東巴教の開祖が彌勒佛密勒日巴に敗北するという點からも、當時の宗教的情況を窺い知ることができる。

第三章　丁巴什羅に關する儀禮

第一章でその内容の梗概を紹介した丁巴什羅に關する神話は、東巴が死んだ時に行われる葬送儀禮の際に朗誦されるものである。本章ではその性格をさらに明確にするために丁巴什羅に關する儀禮について考察したい。

東巴が死去した時、近隣の東巴は葬儀のために驅けつける。その時に、丁巴什羅の儀禮と葬送儀禮が行われなければならない。この二つの儀禮が行われる順番は各地で異なる。ある時はまず丁巴什羅を祭ってから、葬儀を行う。先に葬儀を行ってから、丁巴什羅を祭る場合もある。しかし、東巴が死んだ時は、順番に關りなく必ず丁巴什羅の儀禮は行わなければならない。東巴はこの儀禮を行うことによって東巴教の創始者丁巴什羅に思いをはせるのである。現在行われている丁巴什羅の儀禮の進行過程は、清代光諸年間に記された古籍によるものである。(38)

儀禮を行うにあたり、まず大麥を炒めて作った人形を用いなければならない。これらの人形で象徴されるものは下記の如くである。沙利威登（薩莉韋德）大神、依古窩格（宜孤烏葛）大神、恆丁俄盤大神、丁巴什羅、郎久敬王久戰神、莫崩精如神、優麻戰神、大鵬鳥神、恆依庚空神、瑪來巴郎神、盤孜沙美女神、妥構金補神、色生克玖神、羅注金姆女神、知惠者、獅子、大鵬、青龍の三尊、四頭八眼の考汝神、白い綿羊、白いヤク、美利盧阿普、美利塞阿祖、紅虎に跨った東方の東巴格稱稱補、青龍に跨った南方の東巴勝日明公、黑ヒスイ色のハリネズミに跨った西方の東巴那生崇魯、金黃色の大象に跨った北方の東巴古生克巴、白い法螺貝の色をした大鵬に跨った中央の東巴梭余敬古、十三の女神等。さらに十三の花を使って十三本の矢を作らねばならない。十三本の柏の樹枝を妙めて居那世羅神山の像を作る。その山頂には、白い法螺貝の色をした大鵬鳥がとまる。(39)

鬼霊の人形も作らねばならない。「尼威」地獄の鶏頭鬼、「依道」地獄の狗頭鬼、「許左」地獄の綿羊頭鬼、豚頭の鬼王、「勞瑪義」地獄の蛇頭鬼、大地上の牛頭鬼、霊魂を守護する牢獄の鬼、この鬼は單施羅と呼ばれて、手に九節の丸太を持ち、もう片方の手に旗を持つ。さらに九つの黒い坂に住む黒鬼の人形を九つ作る。九つの人形の手にはそれぞれ紋がある。「達姆」と呼ばれる穢鬼の人形、「里多」と呼ばれる龍王が表示された人形、「卡呂」と呼ばれる猿・狐・三羽の蝙蝠の人形等を作る。[40]

そして四方の鬼霊の人形を作る。東方の鬼は鶏頭で、南方の鬼は狼頭、西方の鬼は鹿頭、北方の鬼は豚頭である。そして飯を盛った碗、小さな燈、板鈴を一個を準備する。

儀禮は四つの場で構成される。①東巴の神壇、②丁巴什羅の神壇、③ナシ語で「督」と稱される柱、④鬼域である。

これらの四つ場について論述するならば、①の東巴の神壇は正房の中央の部屋に設けられる。壁には神像がつるされる。中央には沙利威德の神像をつるす。その右側には挂恆丁俄の神像を、左側には挂依古窩格、土知優麻の神像をつるす。これらの神像の前には机が置かれ、その上に松葉が敷かれる。松葉の上に鋤を一本たて、その先に羊毛を巻きつける。羊毛の絲に翠柏（ショウナンボク）の枝を一本差し込む、鋤の前には舟が置かれ、その中に米を入れる。この米に五寶の矢が一本ささされ、その兩側に白旗がささされる。翠柏（ショウナンボク）で神門を作り、白い綿羊、白いヤク等の人形を安置する。神粮を象徴する米を一盆き、酒と茶を供える。香爐に線香がともされ、神燈もともされる。淨水壺を置き花と柏枝がささされる。燒天香が行われる時は、松枝と翠柏が置かれ、精成した小麥粉と酥油を用いて行わなければならない。燈心に火をつけて机上に供える。神粮の中に供えられた盧神、塞神の人形に禮を行う。[41]

②の丁巴什羅の神壇は、正房の脇の建物に設置され、彼の神像が置かれる。まず丁巴什羅の像を作り、椅子に置き、それから五色の綱を作り、その手に持たせる。像の面前に机を置き、その上に死者のための板鈴、拔浪鼓を置き、酒と

茶、瓜、米殼の花、酥油一碗を置く。酥油の碗の中で、竹の箸で神橋を組み立てる。丁巴什羅の像は白馬に跨っており、その像に白馬二頭と羽根のはえた白い綿羊一頭の人形を供えなければならない。机上には、死んだ東巴のための經書と經も置く。大きな銅鍋を神粮で滿たし、神々の人形を神粮の上に置く。鍋の縁には竹・青柏の枝をそれぞれ一本差し込む。[42]

丁巴什羅が神路を開く時、十三個の人形、十三本の翠柏、十三の花、三十三本の五寶の矢が必要となる。小麥粉で居那世羅神山の像を作る。葬送儀禮に必要な「神路圖」[43]（葬儀用の繪巻き）には、六ヶ所の地獄が描かれ、その部分に鬼靈を遮る三本の枝を差し込む。この枝は「其」と呼ばれ、木牌畫六枚もそれぞれ差し込まれている。鷄頭の鬼靈の人形が置かれ、その兩側に旗が差し込まれる。三兩の白銀の經功錢が置かれる。銅の柄杓も置かれ、この柄杓には人の魂の牢獄が描かれている。牛頭が示され、施知玖補という名の鬼王が柄杓に存することを象徴する。この鬼王は九節の木棒を握っている。木棒には九つの黒り坂が描かれている。黒い麻布を使って鬼橋を作り、九つの掌紋のある九種の鬼靈の人形をそこに置く。黒山羊、黒豚、黒鷄の人形を使って祭鬼を行う。神壇の三脚の上に鐵鍋を置き、鬼のかまどを表示する。そして淨水壺を置き、この壺に黒い麻布をかけ、壺口にツツジの枝を差し込む。この枝は除穢に用いられる。

上記の木牌畫に描かれているものは、下記の如くである。苯牛頭の鬼靈、片方の手で人形を持ち、もう片方の手で九節の木棒を持つ。苯綿羊頭の鬼靈、片方の手で九節の木棒を握り、もう片方の手で汚れた繩を持つ。これは命を奪う六地の鬼域を示している。苯豚頭の鬼靈、片方の手に九節の木棒、もう片方の手で人形を持つ。人類の大地上の鬼域を示す。苯蛇頭の鬼靈、片方の手に汚れた繩、もう片方の手に鎌を持つ。苯犬頭の鬼靈、狗頭の人形と九節の木棒を持つ。苯鷄頭の鬼靈、人形と九節の木棒を持つ。これらの木牌畫に差し込まねばならない。鬼靈の領域の周邊の情況を示し、「神路圖」木牌畫の近くに杉の樹枝を一本差し込まねばならない。

③「督」、ナシ語で「督」とは柱の意味である。[44] 二丈餘りの松の柱に九つの穴をあけ、穴に木、枝を通し上から下へ五色の布で網状に作り上げる。木柱の両端には花をつける。上端には五色の両面の旗をつけ、旗上には日、月が示される。「督」の上には優麻神の神像が置かれ、その下には机が置かれ、机の上には白い毛氈が敷かれる。毛氈の上には鋤が立てられ、その突先には白い羊毛で柏枝が一本くくりつけられる。小さな箕の中に米が入れられ、この米は神粮と呼ばれる。神粮の上には、盧神、塞神と五方の東巴の人形が置かれ、柏の枝で作られた枝で神門、刀、弓、矢が作られて米中に立てられる。そして瓜、西瓜、酒、茶が獻けられ、香がたかれて油燈がつけられる。「督」の周邊には東、西、南、北、中央に分けて一つずつ机が置かれる。五個の机には麻布をかけて神橋を表示する。五方の東巴の人形が机上に置かれ、それぞれに矢、旗、花、油燈が一つずつ置かれる。[45]

④鬼域（別名「毒鬼の砦」）土で三面の山を作る。山の下に水たまりを三つ作る。山の三面は黒、紅、花の色に分けて染める。水たまりの水も黒、紅、花の三色で染める。黒山、黒水は毒鬼の山と湖を、紅山と紅水は仄鬼の山と湖を、花山、花水は猛鬼の山と湖をそれぞれ象徴する。三つの湖の四周には毒鬼の二十三の木牌畫が差し込まれる。二十三の木牌畫は毒鬼の父親占敦務務知、母親班敦許徐麻等二十三種類の毒鬼が描かれている。木牌畫の側には「其」が一本差し込まれており、毒鬼がすでに遮られていることを表示している。三つの湖の周圍には十八本の縦の枝がさされ、十八の眼、嘴、手足を刻んだ人形が置かれる。さらに湖の四方には、鬼靈を遮るための三本の「其」を交差させて差し込む。これとは別に、丁巴什羅の魂を示すとがった木牌畫を描かなければならない。

毒鬼の黒湖には、羊頭の木牌畫が差し込まれ、そこには女鬼可庶瑪が描かれている。可庶瑪は前記した如く、丁巴什羅の配偶者であり、最後に彼に殺された。木牌畫は毒鬼の黒湖に向って立ちられ、その下に可庶瑪の人形が置かれる。その周圍には九種の枝が差し込まれ、縦の木、五つの木の人形を使って門を作る。可庶瑪の像が描かれた木牌畫の裏に、

鬼霊を追い拂うための五股の竹を一本、九本の「基」と交差させて差し込まなければならない。その傍に石を一個置く。木牌畫には、可庶瑪が死んで燃やされた情景が描かれている。可庶瑪の木牌畫の前には、豚肉と一盆の黒色の祭粮（ダッタンソバ）を置き、豚油燈をつける。可庶瑪のすわる木輪車があり、彼女の霊を送る時、この木輪車で連れさらなければならない。

可庶瑪を祭祀する時に必要なものは、五兩の白銀（紙製）、「東巴の杖の由來」經、九本の鎌、九本の鐵綱、九本の斧、九個の皮袋、九つの銅鍋、九本の棘、白衣一着、黒衣一着、九つの人形、九つの木の人形、白い羊毛と黒い羊毛のうちひも、豚頭一個、鶏一羽、鬼橋にかける麻布、柏枝一本、米殼一碗、ダッタンソバの粒一碗、リボン狀の鳥尾一本。

以上で儀禮のための場、用具を紹介したが、丁巴什羅の儀禮を行う時、鬼霊を祓い、彼らに對する償いをするために、大杉を一本立てる、鐵鍋、鐵の三脚、九つの人形と紋様のある面片（小麥粉を練り細長く切ったもの）、尾のついた牛皮一枚（その上で五つの油燈がともされる）が必要とされる。三種の飯が獻げられ、火葬場で鬼霊に食べさせる殼米花とダッタンソバの花が準備される。そして黒山羊、黒綿羊、黒い豚、黒い鶏が供犠に用いられる。神橋の像に麻布がかけられ、神橋の上に五つの油燈がともされる。丁巴什羅はこの油燈から天に昇る。板鈴が三十六條の布につなげられ、神路を示す三十六尺の麻布が開かれ、五種類の五色の布を使って丁巴什羅を魂を招く。地獄の三十六界里には、紅橋にかける六尺の紅布があり、九つの黒い坂を乗り越えるために黒橋にかかる黒い布がかけられる。神像の前には、神橋につるす白布、純銀五兩、米あるいは麥一袋、ダッタンソバ一袋、淨水壺一個（この壺には白銀五兩が入れてある）が置かれる。

準備の目鼻がつくと、儀禮は進行する。神像を掲げ、神座を立て、神粮を供える。ツツジの枝とヨモギの枝を燃やして神壇上の汚れを除去し、儀禮上全體の汚れを除去する。天香を燃やして、油燈をともし、諸神を迎える。東巴たちは

神がかりの状態になり、何人かの東巴が「迎神經」を朗誦する。「什羅無宗」「色肯多祭」も朗誦する。丁巴什羅の招魂を行う時、「招魂」「術賜本領」が朗誦される。何人かの東巴が「督」のまわりで跳神を行う。まず東方の東巴「格稱稱補が巨大な赤虎に跨って踊る。南方の東巴「勝日明公」が青龍舞を踊る。西方の東巴「那生崇魯」が大象舞を舞う。北方の東巴「古生克巴」が黄金の猾（ハリネズミ）の舞を踊る。中央の東巴「梭餘敬古」が大鵬舞を踊る。しかる後、東巴達は鬼靈の領域を一周する。

次に東巴經の開祖である丁巴什羅の出世が述べられる。經典「丁巴什羅の出世」が朗誦される。この時「東巴の神壇の前で、一人の東巴がむしろの上に倒れる。この東巴は手に板鈴、祓浪鼓を握り、丁巴什羅の母親がお産をする姿をまねて、左腕を擧げて彼が左脇腹から誕生したことを示す。東巴は身を起こして跳神を行う。

丁巴什羅が神藥を探すことを象徴して、經典「神藥の由來及び神藥の探索」が朗誦される。一人の東巴が丁巴什羅を演じ、弓矢を持って踊る。上に向かって三回、下に向かって三回、周圍に四回矢を射る。そして淨水壺の中にも射て、神の矢を阿明巴栾山に向って射たことを示す。矢を抜いて壺口に乳白色の藥水を流す。それを碗に受け、神藥を持ったまま跳神を行い、神藥を諸神に獻げる。經典「里多の人形を送る」が朗誦され、「里多」の人形には龍が描かれており、この人形で汚れを取り除き、神に神藥を獻げる。「里多」の人形は泉の近く運ばれる。

經典「毒鬼への償いをする」が朗誦され、ダッタンソバがまかれて、毒鬼の黒湖の周邊で黒山羊、黒い綿羊、黒豚が供犧される。その血を各種の鬼靈が描かれた木牌畫と鬼靈の人形に塗りつける。骨、毛等を燒き、鬼に食べさせたことを示す。

次に女鬼可庶瑪を祭祀する。黒豚、黒鶏を供犧して、可庶瑪に償いをする。さらに黒豚を殺して、豚の血を可庶瑪の木牌畫、人形、各種の木の人形に塗る。そして木輪車で可庶瑪を運び、野外に捨てる。

家に歸り、東巴は經典「督（柱）を立てる」を朗誦する。ここでは「督」の由來が語られ、人々は「督」を立てる。「考呂」と呼ばれる犬頭、猬（ハリネズミ）頭、蝙蝠の頭の人形、九本の手紋のある鬼を祓うための人形。「聽昌」と呼ばれる人形が運びこまれる。これらに飯、燒肉を食べさせてから、野外に捨てる。この時東巴は經典「考呂の人形を送る」、「鬼を祓う人形を送る」、「聽昌」の人形を送る」を朗誦する。

そして毒鬼の黑湖のまわりで飯をたく動作をして、鬼靈に食物を與え、經典「毒鬼の黑湖を取り壞わす」を朗誦する。杖を毒鬼の黑湖につき立てて、法刀で鬼靈の木牌畫、木の人形と杉の木をたたき切り、毒鬼を鎭壓する。三叉の戟に、鳥尾の紐を結びつけて、丁巴什羅を黑湖から救い出すことを表示する。丁巴什羅の像が記された繪に、白い麻布をかける。可庶瑪の人形を木輪車から取り出し、高くて險しい崖に捨てる。鬼靈の汚れを祓うために、汚れを祓う人形にダッタンソバを撒き、鬼靈に償いをする。そして地上に牛皮を敷いて、五つの油燈をつける。

朝火葬場で鷄を一羽殺し、白い米飯、黑く染まった米飯、黃色い米飯を四方に撒く。次に白い麻布を神橋にかける。一本の「其」と五叉の竹に血を少しつけ、家の四方の木を祓う。血酒が鬼域に屆いて（可庶瑪の）九種の棘が表示される。碗に乳汁を入れて竹箸を置く。この竹箸は白色と黑色で、白い箸は金橋、銀橋を表示し、黑い箸は不吉な兆しと腐敗を表示する。黑い箸は斷ち切られねばならない。金橋、銀橋から丁巴什羅が家中にやっく來るとされており、人々は死者の家の門口で彼を迎える。[46]

次に丁巴什羅のために除穢、洗穢が行われる。一人の東巴が彼の人形の頭をとかし、酒と飯を供える。これは丁巴什羅に食物を食べさせることを意味している。この時經典「食物の由來」が朗誦され、彼は家に戻る。ただちに什羅の像を竹製の神房に入れる。戰神に食事を獻げて、神に對して上方に鎭座してくれるように願い、綿羊を殺して供犧を行い、その肝臟を取り扱いながら、「戰神に食物を獻げ、綿羊を殺して肝で占トする」という題の經典が朗誦される。

經典「什羅を祭り、神燈をともす」が朗誦され、東巴達は神燈のまわりを三回回る。經典「什羅乘宗」「色肯多桑」が朗誦され、丁巴什羅の贖罪が行われる。丁巴什羅の法要がなされ、經典「廳羅昌」が朗誦される。この經書は上・中・下の三卷に分かれている。少し休息してから、丁巴什羅を祭る經典が朗誦される。[47]

二日目の早朝、丁巴什羅は神路を開く。まず汚れた鬼靈を追い拂う。ダッタンソバ「神路圖」の鬼靈の領域に撒かれる。九つの黑山を守る鬼靈に食物を與え、九つの黑山を取り除く。つまり、黑山を守る人形を刀で切り倒すのである。一部の東巴がこれらのことを行い、他の東巴がこれに關する經典を朗誦する。東巴は「毒劍魔樹の由來」を朗誦し、刀で「神路圖」に置かれた銅の柄杓をたたき、柄杓の上に牛頭の人形を持ってくる。これは柄杓をたたくことによって魂を送る櫳の門が開かれたことを意味する。これで丁巴什羅の魂は鬼靈に捕われることはない。「督」が立てられ、經典「輪廻の由來」「金空建」（音譯）が朗誦される。これによって地獄の十八層が打ち破られて、地獄の鬼靈への償いがなされる。ダッタンソバが撒かれてそれに關する經典が朗誦される。地獄の鬼靈、人類の大地上の鬼靈に對する償いをする。黑飯、黃飯を使って鬼靈の食事を獻げなければならない。經典「勞桑近金」「拉龍茨沖平」等が朗誦されて、そして「什羅を祭り、神路を開く」「女神の十三界を開く」も朗誦される。

丁巴什羅の魂を送り、その畫像及び「金空」と呼ばれる圖が火中で燃やされる。そして東巴は五幅冠と衣服を脫ぐ。「請盧神」が朗誦され、東巴は跳神を行い、經典「祈賜神威」「祈賜福澤」を朗誦する。この時大東巴が法帽をかぶり、法衣を身に付け、高所にすわって神米を撒く。弟子達は板鈴等を使いそれにあわせて踊る。諸神に向って食物を捧げて、神々を送る。

次に孝子が皮袋を背負い、前に一人の者が彼を案內して、後の者が彼を追い立てる。この所作は、遠くから來た孝行息子が親の喪儀にかけつけるとこうことを意味している。「孝子奔喪」という書が朗誦され、燒天香が行われる。靈が

火葬場に着いてから、東巴は弓、矢を取って五方に狙いを定め、五方の鬼霊を射る。柴で遺體を焼き、東巴は經典「火の來歴」を朗誦し、呪文を唱える。[48]

この儀禮においては、丁巴什羅の誕生から、その死後弟子達が彼を毒鬼から救い出し、安寧へと導くことが語られる。さらにこの儀禮では丁巴什羅に殺された女鬼の可庶瑪の霊が鎮壓されるが、彼女は本稿で考察した丁巴什羅に關する神話において、下記のような意味で非常に重要な役割を果たしている。可庶瑪は地上で人間を食べ、病氣、災難を起こし、三百六十の鬼霊も彼女に協力する。地上には人類、動物の安息の場はもはやなかった。人類は丁巴什羅に救いを求め、地上に降臨することを願う。彼は神々と相談して降臨を承諾する。彼は神々から女鬼鎮壓のために必要な神具、經典等を與えられ、太陽、月、星、雲の間を通過して、それぞれの場所に住んでいた東巴を從えて地上に降臨する。什羅は可庶瑪と結婚したが、策略を用いて彼女を殺害し三百六十の鬼霊も殺す。ただ小鬼のみは殺さなかったので、鬼霊は再び地上に繁殖していく。つまり人類の側から見て、丁巴什羅による可庶瑪殺害までは、地上は全く無秩序の状態であった。しかし彼女の死後、鬼霊も鎮壓され、人類、動植物も平和、安寧を得て新たな秩序を回復する。つまり「神話における時代認識」という觀點から可庶瑪は重要な役割を果たすのである。

また彼女の死後丁巴什羅は最初の巫（シャーマン）として鬼霊を鎮壓し、人々の魂を祖先の地に導くという役割を果たすのである。そして彼の死後その役割は三人の弟子と三百六十人の東巴に受け繼がれ、それが東巴教の成立につながる。丁巴什羅に關する儀禮は以上のことを物語るのである。

結語

以上の如く、本稿ではナシ族の東巴教の開祖丁巴什羅に關する神話について考察した。ナシ族には數多くの神話が傳承されているが、これらの神話には、特にチベットからの影響が濃厚に見られる。ナシ族は歴史的に見て、後漢代の西羌の後裔とされている。唐代にはナシ族の主要居住地域は吐蕃の支配下にあり、この時代にチベット古來の宗教であるボン教が布教されて、ナシ族の東巴教に大きな影響を及ぼした。丁巴什羅の神話の最初の部分に見られる「卵生神話」「尚白忌黑」の觀念は、ボン教にも見られる。また明代の木氏土司の政策からも、チベット佛教の影響がナシ族の社會、文化に深く浸透した。丁巴什羅とラマ僧との爭い、丁巴什羅の彌勒佛への敗北等からこのような宗教的對立を窺い知ることができる。このようなことがチベット・ビルマ語族の中でも、ナシ族の神話が他種族に比してチベットからの影響が大きいということが理解できよう。

またこの神話では、丁巴什羅は神々によって人類救濟のために女鬼・鬼靈の征討に派遣されたことが語られる。彼は女鬼・鬼靈を鎮壓して最初の巫師（シャーマン）としての役割を果たし、その職務は弟子である東巴に繼承される。このことから東巴教の成立に至ることをこの神話は示唆するのである。

またナシ族の神話において丁巴什羅は人間界と龍の支配する自然界との間を調停する役割を果たしているという點も付け加えておきたい。[49] そしてナシ族の社會に廣く見られる白石神の信仰・丁巴什羅の左脇からの誕生の問題は今後の課題としたい。

注

(1) 楊福泉『東巴教通論』中華書局・32—34頁、二〇一二年。黒澤直道『ナシ（納西）族宗教經典音聲言語の研究—口頭傳承としてのトンバ（東巴）經典—』雄山閣、5—7頁、二〇一二年。

(2) 李近春・王承權『納西族』民族出版社　10—11、21—22頁　一九八四年。

(3) 李近春・王承權『同上』4—5頁。楊福泉『納西族與藏族歷史關係研究』民族出版社　31—40頁、二〇〇五年。

(4) 雲南省民族事務委員會編『納西族文化大觀』雲南民族出版社　115、136—143頁、一九九九年。

(5) 雲南省民族事務委員會編『同上』104—110頁。白庚勝『東巴神話研究』雲南大學出版社　雲南人民出版社244—248頁、二〇一二年。

(6) 《納西族文學史》編寫組編『納西族文學史』四川民族出版社78—82頁、一九九二年。

(7) Dto-mba Shi-lo は J. F. Rock 氏が用いた表記である。本文中のローマ字表記は Rock 氏が使用したものである。中國の研究者の間では、「丁巴什羅」が表記として最も多く用いられている。なお「多巴神羅」は李霖燦氏が用いた表記である。

(8) J. F. Rock The Birth and Origin of Dto-mba Shi-lo, the Founder of Mo-so Shamanism, Artibus Asiae, Vol.7, PP. 13-18, 1937　李霖燦「多巴神羅的身世」國立北京大學中國民俗學會民俗叢書㊺東方文化書局複刊102—110頁、一九七二年。東巴文化研究所編譯「超度什羅儀式・迎請・殺三百六十个鬼卒・殺希固松瑪」『東巴古籍譯注全集』第72卷雲南人民出版社1—6、17—22頁、一九九九年。中國社會科學院民族學與人類學研究所、麗江市東巴文化研究院、哈佛燕京學社編「超度什羅儀式・什羅身世」『哈佛燕京學社藏納西東巴經書』第一卷中國社會科學出版社、二〇〇二年45—53頁。

(9) J. F. Rock 同上　PP.18-19, 23-33, 李霖燦『同上』111—112, 115—116, 117—118頁、中國社會科學院民族學與人類學研究所編『同上』54—63頁。東巴文化研究所編譯『同上』23—33頁。

(10) J. F. Rock 同上　PP.26-39, 李霖燦『同上』118—129頁。中共麗江地委宣傳部編『納西族民間故事選』雲南人民出版社87—88頁、一九八一年。東巴文化研究所編譯『同上』33—53頁。

(11) 中國社會科學院民族與人類學研究所編『同上』98—117頁。東巴文化研究所編譯『同上』53—61頁。

(12) 神話の最初の部分に關しては注（8）參照、なお本文中の神々、精靈の出現の順序は文獻によって異なる。

(13) 楊福泉『納西族與藏族歷史關係研究』172—174頁。

(14) 楊福泉『同上』178—181頁、「納西族〝山中靈界〟觀及其演變」『納西學論集』民族出版社所收411—432頁、二〇〇九年。白庚勝『東巴神話研究』363—387頁。光嶌督『ボン教學院の研究』風響社6—7頁、一九九二年。

(15) 楊福泉『納西族與藏族歷史關係研究』167—171頁。白庚勝『同上』229—238頁。

(16) 神話の内容に關しては注（9）參照。なお本文中の「父子連名制」については、白鳥芳郎氏、竹村卓二氏の詳細な研究がある。

(17) 楊福泉『納西族與藏族歷史關係研究』156—165頁。光嶌督『ボン教學統の研究』117頁。

(18) この白蝙蝠は、「白蝙蝠取經記」という經典に登場する。天地の間で男女に病氣の痛みが起こり、白蝙蝠が使者として天上に派遣され、女神のもとに占トの技術を學びに行った。白蝙蝠は幾多の曲折を經て、人類に數種類の占トの技術をもたらした。戈阿干『東巴神話與東巴舞踏』雲南人民出版社20—21頁、一九八四年。

(19) 物語については注（10）參照。

(20) 物語については注（11）參照。

(21) 毒鬼については、J. F. Rock The Na-khi Nǎga Cult and Related Ceremonies, Serie Orientale Roma, IV Part I pp. 89-90 Note39. 1952、李霖燦『麽些象形文字音標文字字典』文史哲出版社138頁、一九七二年。方國瑜『納西象形文字譜』雲南人民出版社358頁、一九八一年參照。

(22) なお丁巴什羅に關する神話に登場する神々、精靈、鬼靈はナシ族の他の神話のものと共通である。しかし、丁巴什羅はナシ族の神話の中で最も有名であり、ナシ族はほぼ全員がその内容を知っているといわれる「人類遷徙記」には登場しない。本文でも紹介したが、丁巴什羅と父方の祖先、母方の祖先の系譜は「人類遷徙記」の主人公崇忍利恩誕生までの系譜と一致しない。丁巴什羅がナシ族の神々と別系統のものであるかについては、數々の研究者が指摘しているが、今後の課題としたい。

(23) J. F. Rock The Na-khi Nǎga Cult and Related Ceremonies, 楊福泉『納西族與藏族歷史關係研究』156—158頁、光嶌督『ボン教學統の研究』115、617頁。

(24) 楊福泉『同上』157—159頁。趙心患『納西族與藏族關係史』四川出版學團・四川人民出版社211—213頁、二〇〇四年。

(25) 楊福泉『同上』159—162頁。

(26) 楊福泉『同上』165頁、林向蕭「〝東巴教本是鉢教的一支〟辨」『納西學論集』民族出版社147—172頁、二〇一三年。白庚勝『東巴神話研究』274—280、307—317頁。趙心患『納西族與藏族歷史關係研究』9、214頁。

(27) 楊福泉『同上』187頁。

(28) 白庚勝『東巴神話研究』229—238頁。

(29) 楊福泉『納西族與藏族歷史關係研究』168—169頁。

(30) 楊福泉『同上』47頁。「東術爭戰記」中共麗江地委宣伝部編『納西族民間故事選』130—143頁。
(31) 楊福泉『同上』47—55頁。
(32) 土司とは中國王朝が少數民族を統治するために官僚に任命した當該民族出身の土酋をいう。このような土酋は土司、土官と稱され後に土司と總稱されるようになった。白鳥芳郎「華南・東南アジアにおける權力構造形成の基盤」『華南文化史研究』六興出版社399頁、一九八五年。武内房司「西南少數民族」『明清時代史の基本問題』汲古書院所收584頁、一九九七年。
(33) 山田勅之『雲南ナシ族政權の歴史—中華とチベットの狭間で—』慶友社15頁、二〇一一年。
(34) 楊福泉『納西族與藏族歴史關係研究』97頁。
(35) 楊福泉『同上』104頁。山田敕之『雲南ナシ族政權の歴史』101頁。
(36) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『中國原始宗教資料叢編（「納西族卷」（和志武・錢安靖・蔡家麒主編））上海人民出版社206頁、一九九三年。
(37) 李霖燦『麽些研究論文集』國立故宮博物院277—284頁、一九八四年。
(38) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『中國原始宗教資料叢編』208頁。
(39) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『同上』208頁。
(40) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『同上』208頁。
(41) 呂大吉總主編、何耀華副總主編208—209頁。
(42) 呂大吉總主編、何耀華副總主編210頁。
(43) 「神路圖」（Hä zhi pi）は葬送儀禮に用いられる繪卷であり、棺の前で廣げられる。この繪卷は約40フィートのものであり、北東の方向に向って棺と平行に廣げられる。J. F. Rock The Na-khi Hä zhi p'i, Bulletin de L'Ecole Française d'Extrême Orient XXXVII fasc.I 1937.
(44) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『中國原始宗教資料叢編』209頁。
(45) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『同上』210頁。
(46) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『同上』210—211頁。
(47) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『同上』211—212頁。
(48) 呂大吉總主編、何耀華副總主編『同上』212頁。

(49) 東巴文化研究所編譯「祭署・神鵬與署爭鬪的故事」301—332頁。